



カリフォルニアで「自分の味」を追い求める

Human Documentary

かつて、日本酒を醸造する蔵は女人禁制の場所だった。酒造りをつかさどる杜氏は男の仕事。ワイン造りにおける杜氏といえる「ワインメーカー」もまた、伝統的に男性ばかりだったが、昨今、この世界への女性の進出が著しいという。カリフォルニアでいきいきとワイン造りに励む女性たちの姿を追った。

文=井口優子 写真=押本龍一
text by Yuko Iguchi photographs by Ryuichi Oshimoto

女神



たち

ワイン造りはサイエンスと アートの合体

Heidi Peterson Barrett

ハイディ・ピーターソン・バレット(44)は、14年前、子どもができた時、
ワインメーカーとしてフリーランスの道を選んだ。いくつかの
ワイナリーとコンサルタント契約を結び、各ワイナリーの味を造りだす。

当時は、彼女のような選択は非常にまれだった。
あえて「小さなワイナリー」を選んで、現在、8つのワイナリーと契約し、
自分のレーベルのワインと合わせて計9種類のワインを造っている。
彼女の造りだすワインの素晴らしさに、付いたニックネームが「ワインの女神」。



彼女が契約するパラダイム・ワイナリー。昨年9月11日の同時多発テロ以降、アメリカの国旗が掲げられていた。

「ワイン造りは、サイエンスとアートの合体」とハイディは語る。日々、研究に余念がない。



ハイディが手がけた「SCREAMING EAGLE」
92年産6リットルのボトル（普通瓶8本分）
に、2000年のナバのオークションで50万ドル
の値がついた。



ハイディが手がけたワイン。左から「OAKFORD '98」
(100ドル)「LA SIRENA '98」(147ドル)「SHOWKET
'98」(69ドル、以上カベルネ・ソーヴィニヨン)。「LAMBORN
FAMILY '99」(30ドル、ジンファンデル)。



パラダイム・ワイナリーのアシスタントのヘレン(29)が、発酵中のワインの糖分を測る。

ジンファンデルを試飲するハイディ。
「私がおいしい!と思うワインしか造りません。その味に多くの人々が共感してくれるのは幸運なことです」。